ビブリア

No. 39

発行　いわき市平上荒川字長尾30
福島工業高等専門学校
編集　図書委員会
昭和55年7月17日

福島高専 図書館報

◇巻頭言◇

「書」をこそ魂のよすがに

図書委員 電気工学科教官
鴨沢　勅郎

「般若心経」という経典に「色即是空　空即是色」という，かの有名な一句がある。全て形あるものは滅し，滅するがゆえに存在している限り，最大の価値を発揮すべきであるという意味である。我々，人間とて例外でなく，いつかは自己の肉体が喪失していくのは必定の理である。諸君は，この世に生を受けて10有余年，未来へ大きく羽ばたく年代であるが，いま生きていることが，いかに多くの人々の援助，助力に負うているか計り知れない。その意味で我々は生きているのでなく他人により生かされていると言うべきであろう。

諸君は本校で学びつつある身であり多くの教官・友人からの薫陶を得て高専生活を送っている。困惑・心痛な事が生じたときは，いつでも指導・助言を得られる非常に恵まれた環境にあると言っても過言でない。しかし卒業して実社会に巣立つとき，そこには本校での他力による生活でなく自己自身で考え，判断し行動する自力の人生が待ち受けているであろう。師や友は諸君の周囲に常に存在するとは限らず，その時，諸君は一体，何を精神のよすがとし，そしてまた心の糧に，いかなるものを希求したらよいであろうか。

肉体は，いつかは失くなるもの，けれども人の思想，その思想の上に書かれた「書」は永遠に失われることなく我々の心身のみならず，後輩のそれにも多大の影響を与えるものであり，とりもなおさず，それは内村鑑三の言う「後世への最大遺物」ではなかろうか。

折にふれ，いろいろな書をひもとくことは，その著者との出会いであり，対話であって自己の心のよりどころとなり，かつまた物事に対しての思考力・弁別力・実践力の向上に寄与するところ非常に大であろう。

道元禅師は「人生とは何か，それは完全燃焼である」と教示している。ろうそくに点火すれば一瞬の休みもなく最後まで燃えて周囲を照らしつづける。一度燃えた芯は，もはや再度ともることはない。それは，まさしく「色即是空　空即是色」である。人生もまた然りであって，自己の人生の顕現に最大限の努力を鋭意，傾注すべきであろう。

かかる意味で再び経ることのない青春時代に大いに書に親しみ自己完成に邁進し，生かされていることへの報恩として他の人々に明りをともす素地を十二分に培（つちか）うことを祈るや切である。

～～～ 目　次 ～～～

巻頭言－「書」をこそ魂のよすがに……鴨沢　勅郎　1
読書と図書館への勧め……菊地　稔　2
土木と小説の世界……志賀　宣郎　3
The century Dictionary の覆刻版について……山崎　道雄　5
授業を読む……5
新着図書目録……13
君の読後感を世に問うてみませんか…19
夏休みの図書館……20

読書と図書館への勧め

図書副委員長
3E 菊　地　　稔

まず初めに，僕の読書歴について少し書きたいと思います。僕は，小学生の時はもちろん，中学生になっても一向に読書らしきものをしないで過ごしました。石川達三の○○がどうのとか，太宰治がどうしたとか，友だちがそんな話をしていても何の事だかわからず全くついていけなかったものです。そんな中で覚えているのは，同じクラブだったK君。下校途中に近くの本屋で，「この本おもしろいから読んでみなよ」とそう言って星新一の「きまぐれロボット」を勧めたのです。思えばその本が，僕の読書らしい読書の第一冊目でしょう。その後，夏目漱石の「坊ちゃん」などを読んだ記憶がありますが，今，それらの本は，どこかへ行ってしまって手元にはありません。

中学生の時は，それ以後，時折読む程度に終ってしまって高専に入学。一年生のうちは，クラブやその他で時間がつくれずに過ぎてしまいました。そして二年生の春だったか，現国の時間に「新潮文庫の100冊」という文庫本の図書案内が渡されたのです。「ようし，ここに載っている本，全部読むぞ」その気になって一気に文庫本を読み始めました。

読書が習慣になると，もう勉強なんかそっちのけ，夜は消燈の時間までずっと読書ばかりです。それに，今読んでいる本の半分も読み終えていないのに，次の本を選んで用意しておく，そういった具合です。それに少しずつでも本棚に自分の読んだ本が並んでいき，増えていくというのは，とても気持ちのいいものです。「何のために本を読むのか。」そう聞かれたら，「棚の本を一冊でも多くするため。」そう答えるかもしれません。

こう僕の読書歴なるものを書いてみましたが，僕のものなど，まだまだ小さな，レベルの低い方でしょう。まわりには，僕など足元にも及ばないような勢いで読書をしている人がたくさんいます。とても偉いと思います。

二年にも満たない僕の読書歴のうちで，一番感動した本は，アンネーフランクの「アンネの日記」です。翻訳のためでもありましょうが，とても文章が上手なのです。―― 彼女は毎日の出来事を実に鮮明に日記に記しています。同居中のおじさんの心理とか，僕達が普段何気なくやり過ごしているような事を鋭くとらえてていて，読んでみて，「あーこれは僕の場合にもいえてるなー。」なんて事がたくさんあります。戦争・虐殺，それに伴う隠れ家の生活。今の世の中から想像できましょうか。

「アンネの日記」に書かれている事は事実でしょう。また，他の小説などが事実でなくても，それは，著者の生き方そのものでしょう。そのような，実際の出来事や，他人の生き方を与えてくれるのが，書物・本です。僕達が経験できない事を教えてくれるのが，本です。でも何もせずに待っていては，それらは得られません。こちらから求めていかなくては…。本を読まない人は，貴重な経験を捨てているのです。とてももったいのない事だとは思いませんか？　経験するために本を読む。僕はそう思うのですが。

話は変わります。学校図書館の話です。みなさん，帯出票はもう作りましたか？　残念ながらクラスに何人かの人がまだ作っていないのです。その人たちは，レポートをどうやって書いているのでしょうか。図書館を利用しないのは，とてももったいない事です。学生証を持っていって書庫に入るだけでもかまいません。図書館を利用してください。何度か足を運んでいるうちに，自然と向くようになると思うのですが……。

それに，残念ながら図書館にも，問題点がありましょう。利用してみて，どうもここがまずい，そう思うところがあったら，クラスの図書委員へ言ってください。学生のための図書館です。学生の手でより良くして行かなくてはならないでしょうから。

"土木と小説の世界"散策(トンネル)

土木工学科教官
志　賀　　宣　郎

"土木と小説の世界"とは4年ほど前，土木学会誌で誌上図書館なる特集を組んだ時，「土木屋さんの史学散歩」（自家出版）の著者，楠善雄氏が寄稿されたものの題名である。その中の100冊を超える小説類のリストは，こういった方面に興味を持っていた筆者にとって驚異であった。このリストアップされた本の中には絶版となったものも多く，約半分ほどが手に入ったに止まっている。しかしこの出版ブームの中にあって，土木を題材とした小説類も急増しているように見え，このリスト以外で新しく蔵書に加えることができた本も，すでに100冊を超えている。これ等は土木全般にわたる小説・戯曲・ノンフィクション・童話・随筆を含み，非常に広い範囲にわたっているので，今回は焦点を少し絞り，副題「トンネル」ということで筆を進めることとする。

最近「トンネルの歴史」（村上良丸著，土木工学社）全4巻が出版されることになり，現在まだ3巻までであるが，この本は原人の洞窟生活，そしてピラミッド内の通路もトンネルの一つということで稿を進めているので，この4巻の大作は土木史というより文化史・技術史といった感じで完成が待たれる。この土木の，そして技術の全体の流れを知ることは非常に大切なことと思うし，又他の科の学生にも十分興味の持てるものと期待している。

「ザ・ベストテン」，「ザ・ジャパニーズ」，「ザ・ポート」そして「ザ・ウイスキー」等々，ザ…ばやりのこの頃であるが，「ザ・トンネル」といったら，どんなトンネルを思い浮かべるだろうか。土木の学生も含めて多いのは，川端康成の「雪国」の長いトンネル（このトンネルは旧清水トンネルに当たる）かも知れない。或いは生まれ育った所にある。又は汽車通学で毎日通るトンネルかも知れない。著者にとっての「ザ・トンネル」は，初めてのトンネルの現場で苦労した，十和田湖附近の山中，最小断面の水路トンネルがそうである。しかし日本のというより世界の「ザ・トンネル」は，全長53.9 kmの青函トンネルでなければならない。ところが残念なことに「ザ・トンネル」なる題名（正式にはザ・タネルか）の小説は既に発行ずみとなっている。これは土木技術者でもあったロバート・バーン著の「ザ・トンネル」であり，邦訳の題名は「海峡トンネル爆破」（集英社）である。ドーバー海峡横断の海底トンネル（全長51.5 km）工事を舞台とした土木技術者と自然保護運動家で女流写真家（勿論ミス・ユニバース並みの美人），そしてこのトンネルを爆破しようとする過激派がからまる内容のものである。青函トンネルの計画は戦前からあり，現在75%ほど工事が進んでいる。全長53.9 kmは勿論世界一であり，この大土木工事を題材としたスケールの大きい小説が生まれることを，そして全世界に向けて改めて，「ザ・トンネル」なる題名で出版されることを期待するのは筆者ばかりではあるまい。なおドーバー海峡の海底トンネルの計画については，「技術者の夢」（ウイリィ・リィ著，森北出版）にくわしい。

旧仙台工専の土木工学科の学生の間に歌い継がれて来た土木讃歌の一節に"地球のど真中に，トンネルうがって，日本とブラジル，陸続き」というのがある。ところが場所こそちがえ，このようなでっかいトンネルを取扱った小説が現われた。即ちハリー・ハリスン著「大西洋横断トンネル，万歳！」（サンリオ・SF文庫）である。これは真空状態にしたトンネル内をリニアモーターカーが時速3,200 kmでつっ走るという海底トンネルを，ニューヨークとロンドン間に建設するSF物である。

岩盤の最高温度165 ℃ものトンネル内で仕事ができるのか。フォッサ・マグマ，大破砕帯，大湧水でのトンネルは？，毎秒1,000 mのスピードといわれる泡（ホウ）雪崩とは……等々には，「高熱隧道」（吉村昭著，新潮文庫），「小説丹那隧道」（秋永芳郎著，新人物往来社），「黒部の太陽」（木本正次著，講談社），「黒部ルート殺人事件」（斉藤栄著，光文社）が明らかにしてくれる。

最近人気の万才，三球・照代の"地下鉄の電車はどこから入れる"には，「地下鉄物語」（種村直樹著，日本交通公社），「地下鉄」（毎日新聞社会部編）をどうぞ。

暗い話，戦前の土木工事，ドボクと濁音が二つ重なり何となくぱっとしないのに加えて，さらに土木に対するイメージを暗くしているものに，タコ部屋がある。

タコも暗いトンネル内での仕事となると，さらに陰惨である。しかしこれ等も土木の，人間の歴史を探る上で避けて通るわけにいかない事実である。この問題については「常紋トンネル」(小池喜孝著，朝日新聞社)，「実録土工・玉吉」，「タコ部屋一代」（高田玉吉著大平出版社），「黯い足音」，「生きものたち」（小桧山博著，集英社），「人夫考」（高田護著，未来社）「雪の墓標」（小池喜孝・賀沢昇著，朝日新聞社）があり，題名を読んだだけで何か伝わってくる。中でも雪の墓標の著者，賀沢昇氏はいわき市出身であって見れば，ずっと身近な問題のように感ずる。勿論こういった問題は我国だけではなく，遠くピラミッド・万里の長城の建設もそのはずである。手元にある小説の中では，アフリカはウガンダで，人喰いライオンに多くの犠牲者を出した鉄道工事を書いた「人喰鉄道」（戸川幸夫著，毎日新聞社），1860年頃のアメリカ大陸横断鉄道の建設に，銃と鞭で支那人労務省に，強制労働させたという「美国横断鉄路」（久生十蘭著，シャレート館），戦時中のビルマ戦線，クワイ河捕虜収容所の人達による「戦場にかける橋」には，ピエール・ブール著（はやかわ文庫）のものとクリフィード・キンビク著（サンケイ新聞社）のもの，および「泰緬鉄道」（広池俊雄著，読売社聞社）とがあり，日・英・仏三者三様のとらえ方で後世に伝えようとしている。

「ノストラダムの大予言Ⅰ，Ⅱ」（五島勉著，祥伝社）によれば，1982年に惑星が直列に並び，その頃アジアの果ての国に大地震が，1999年8月18日には，太陽を頂点，地球を十字の中心にしたグランド・クロスが出来，地球が破滅するという。我国は地震大国であり，近い将来にも関東大地震クラスの東海大地震が予測されている。大地を相手とし，そこに構造物を造らねばならない土木技術者にとって，非常災害時・パニック時における構造物内外での人の動き，人間行動学といったものには大きな関心がある。地震でトンネル内にとじ込められた老若男女を書いた「14人の旅行者」（西村寿行著"鬼が哭く谷"より，角川文庫），そして「関東大震災」（吉村昭著，文芸春秋社），「東京大地震M8」（生田直親著，徳間書店），「大地震」（グループ915著，プレジデント社），「日本沈没上下」（小松左京著，光文社）があり，又「見えない洪水，ケースD」（糸川英夫外著，ソニー出版）では，ノストラダムに合わせてか，地球破滅の日が1999年7日24日に始まるとしている。

さて「箱根用水」（タカクラ・テル著，東邦出版社）外にも，昔の水路トンネルの掘り方などが出ているが，「琵琶湖疏水図誌」（東洋文化社）に明らかなように，つい100年ほど前のトンネル工事では，入口の工事を洞門工事として切りはなし，美しく化粧し，有名人の揮毫による題字を掲げ，周囲の風景にマッチさせようとしている。何かゆとりがあるように思えてならない。自然相手の仕事はかくあるべきかと考させられることがらである。

「暗く侘びしいトンネルがただ一つだけあった。それはわたしのトンネルだった。」という言葉がやっと最後の方に出てくる，E・サバト著「トンネル」（国書刊行会）があるかと思うと，三木卓著の「隧道」（すばる1979年11月号）では約8頁の短編の中に33回もトンネルなる言葉が出てくる。映画にもなった海底二万哩の著者ヴェル又は「地底旅行」（角川文庫）を書いているし，それが現代版となると「地底元年」（原さとる著，毎日新聞社）となって，近い将来起こるであろう氷河期に日本の地下にある大空洞へ日本国全部が移り住むという話。

このような本の読み方の良し悪しについては，よくわからない。しかし何でもよい，何か理由をつけて少しでも多くの本が読まれれば，それでよいと思う。こういった読み方でということになると，土木の学生は芥川龍之介の「トロッコ」（角川文庫外）を，機械の学生は同じく「歯車」をということになるし，材料力学の大家チモシェンコの「チモシェンコ自伝」（東京図書）は，土木・機械の学生の必読書になる。電気では，エレキテルの平賀源内の話，そしてアンペア，クーロン，ボルト，ファラッド，ヘンリー達……，化学では錬金術師たちの話，そしてキューリ夫妻……残念ながらあと出て来ない。

かつて曽野綾子が「無名碑」（講談社）を出した10年前には，土木学会誌でも取り上げ，著者と東大の高橋教授との間で"無名碑をきざむ人々"という題で対談がなされた。前述の楠氏（現在東京都府中市勤務）が長年かかって集められた蔵書が約100冊あまり，ところがその後4年程でさらに100冊以上増えているということである。曽野綾子はダムを舞台とした大作を書いているという。井上ひさしが週刊現代に連載している「四千万歩の男」は伊能忠敬が主人公だから，出版され次第蔵書に加えなければならない。今回この文にのせた本は40冊あまり。我が蔵書の約4分の1，又機会があったら紹介するつもりである。なお本のリストは今までのように土木の各教室に掲示するので，何でもよい，自分の本棚を少しづつ増やしてほしいと思う。又何かそれらしい本を見つけたら一報してほしい。安部公房の「石の眼」（新潮文庫）は学生に教えられて求めたものである。

The Century Dictionary の覆刻版について

英語科教官
山崎　道雄

ことばは時代と共に変わる。またことばの研究も時代と共に進歩する。だからことばの書である辞書も、時代と共に変わり進歩する。この意味では辞書は新しいほどよい。こうして，よい辞書はたえず改訂されながら長い生命を持続してきたのである。

しかしながら，辞書の中にはかつて名著の評価を得ながら，諸般の事情で絶版になって姿を消してしまったものもある。その中には，その古さにもかかわらず時代を超えて古典的価値を有するものもあり，その学問的価値と，それを手に入れることの難しさの故に，「幻の名著」と称されるものがある。

今回，本校図書館で購入した「センチュリー辞典（全七巻）」は，400部限定で刊行された，まさにその「幻の名著」の覆刻本である。

英語の辞書といえば，英国のO.E.Dとアメリカの Webster が双璧とされるが，Century はアメリカで出版されたもので，Webster のようにごみごみしていないでゆっくりしており，用例なども文学上の名句がふんだんに引いてあり，百科辞典的知識も詳しく，愛用者の多い辞典だった。特にその努立した一巻の固有名詞辞典は，古いながらも今でも他のいかなる固有名詞辞典もこれには及ばないとの評すらある位である。（親辞典が絶版になったあとも，この固有名詞辞典は改訂増補されて1954年に発行されている）

この辞書の初版は1889年で全6巻だったが，それに固有名詞辞典と地図帳が加わったり，補遺や巻立ての変更があったりして全12巻となり，1911年以来は改訂されないまま絶版となった。こんど出た覆刻版は，1914年版を底本とし，全12巻を地図帳だけのぞいて，7巻にまとめたものである。O.E.D.Webster とならんで本校図書館にCentury が備えられたのは嬉しいことである。

（附言）　現物は，閲覧室のガラス戸棚に，9月初まで展示しておきます。

（図(もく)みに価格は　168,000円でした。）

「授業」を読む

(1)　ある明治人の記録
—会津人 柴五郎の遺書

石光　真人編集　中公新書

明治維新に際し，一方的に朝敵の汚名を着せられた会津藩は，降伏後，陸奥・下北半島の火山灰地に移封され，藩士は寒さと飢えの生活を強いられた。明治33年の北清事変（義和団事件）で，その沈着な行動により世界の賞讃を得，のち陸軍大将にまで進み，中国通として重きをなした柴五郎は，会津藩上級藩士の五男に生まれた。十歳の時，会津落城に遇い，後年，その時に自刃した祖母・母・姉妹を偲びながら，維新の裏面史ともいうべき，惨苦の少年時代の思い出を遺した。『城下の人』で知られる編著者が，その記録を整理編集し，人とその時代を概観する。

4土　宗像　豪

私が今まで読んだ本のうちで，現代を背景としたものは，自分の感覚でそのおもしろさを感じることができ，また，かなりの時間を遡ってのものなら，それなりに歴史的なおもしろさを見出すことができた。しかし，背景になる時代が，明治や大正となると，どうも中途半端な印象があって，今まで敢えて避けていたような気がした。この小説の主人公が会津人であることと，ドキュメントであるということだけが，私の興味を引いたのが幸いだったように思う。

私は普通，教科書の中の小説や，教材となるものは，授業の前に一度はさっと通読していた。しかし，私が初めてこの本を開いた時，なにやら読みにくそうな文章だったので，読む気力を失い，授業で先生の声を追

ったのが，この小説との本当の出合いとなった。
いざ読んでみると，さほど読みにくい文章ではなく，それどころか，次々に出てくる今の私にはまるで経験のないショッキングな内容に，いつしか深い関心を持っていた。
主人公の悲惨な少年時代，想像を絶する生活，そして生きることが困難な時代。
今の私には，実感として感じるのは不可能なことばかりが書かれてあった。

まず最初に私は，会津戦争で武家であったために主人公の祖母・母・姉妹が，自らの手で自らの命を絶ったということに，大きなショックを感じた。武士の家が非常に厳格だったのは私も知っていた。しかし，これほどとは思わなかった。これが，主人公の不幸のはじまりになるわけなのだが，当時10歳前後の主人公にとって，あまりにも惨めすぎると思った。もしも私が，この主人公の立場だった時のことを思うと，どうにもやりきれない思いになる。自分の大切なものを，一度に奪われた主人公の心の中は。察するだけで忍び難い。

それから続く，不幸の中での飢餓生活。これも私の想像などでは推し量ることのできない世界だった。文の一語一語に驚きを感じずにはいられなかった。こんな生活が，今からたった百数年前に，現実に営まれていたなんてとても考えられない。しかも私たちよりずっと年下の少年が，これに耐えていたとはどうしても信じられない。もし今の私たちが，主人公と同じ境遇に陥ってしまったとしたら，はたして生き残るだけの気力と生命力を持つことができるだろうか。
はなはだ疑問である。

昔，私がまだ５，６歳の頃，私の父が事業に失敗したり，その他種々の理由から，約２年ほどかなりひどい生活を送った経験がある。と言っても，私にははとんど当時の記憶がなく，後になって両親や昔からの知人に聞いた話なのだが，借金のため住んでいた家も失い，両親はかなり苦労したらしい。今でもたまに知人と会うとその頃の話をする。

しかし，どんなにひどい生活といっても，日に３度の食事は取っていたし，布団もあった。私が辛かったことと言えば，せいぜい欲しい物が買ってもらえないとか，新しい服を着せてもらえないとか，その程度のものでしかなかった。主人公の生活とは，全く比較にならない。それでもみんなは，「あの頃はひどかったね。」と口々に言う。確かに両親にとってはひどかったのだろう。それならば，この主人公の生活は，いったいどんなものだったのだろうか。布団や服などはともかく，生きることの最低条件である食べることさえ覚束ない状態だったのだから。それは，私たちの想像を，はるかに超越したものであったに違いない。

それからの，主人公の下僕生活にしても，今の私たちには，当然とどかない世界である。最も生きにくかった時代を，年端もいかない少年がたった１人で生きてゆくには，どれほどの苦労があったのだろう。15歳で親を離れ，親から金をもらい，まわりの人々から，慰めの言葉を受けた私とは雲泥の差がある。

私は，これでよいのだろうかと思った。
戦争を経験した人は，私の父もそうだが，よく敗戦当時の苦労話をする。私は，そういった話を聞くと，時折耳を閉ざしたくなる時があった。しかし，思えばそういう人たちはみんな，そういった生きにくい時代を，苦労して自分の力で生きぬいてきた人たちばかりだ。本当なら，尊敬しなければならないはずなのに。今まで私は，そんなことすら気付かずにいた。自分が本当の苦労というものを知らないために，私は，これでよいのだろうかと思った。今の私たちは，あまりにも苦労というものを知らなすぎる。生きることについて，あまりにも無頓着すぎる。

とかく住みやすい時代に生まれ，苦労もなく生きてきた私たち。苦労と言えば，親からもらうお金の工面や勉強ぐらいなもの。
そんな私たちが，この主人公のような，はたまた生きにくい時代を生きてきた人々のような，生きることについての執着心，それに伴う気力を持つことができるのだろうか。
確かに今の世の中は，生きるのに大変都合がよい。しかし，こんな楽な世の中が永遠に続くとは誰にも言い切れない。もしかしたら，明日にでも暗黒の波が押し寄せるかもしれない。そんな時，私たちにいったい何ができるのだろう。波に流されることしか知らない私たちに，波乱の世の中を，渡り切れるだろうか。この血涙のにじんだ少年時代を送った，この主人公柴五郎のように。

４Ｍ　武藤たすく

この物語は，歴史の流れの中で敗者となった会津藩側から書かれたもので，しかも子供の眼を通した映像なので，その当時の会津の人間の本心というものがよく描かれているように思う。

明治維新という激しい流れに出会う時，生き残るには流れに身をまかせるか，なりふりかまわず切り開いてゆくしかない。そこに踏みとどまろうとする人間は

敗者となる。そうして朝敵の汚名を着せられた会津藩だが，百年以上経過した現在，我々の中にそういう意識は全くない。むしろ白虎隊のイメージなどど華々しく散っていったというイメージの方が強いようである。しかし会津藩は散ってもその人々は生きているし，生きて行かねばならない。朝敵の汚名を着せられた人々は，それが故に大変な苦労を強いられることになる。実際，このような事実があったことをほとんどの人が知らないだろう。このような仕打ちを受けたということは薩長人の会津憎しの感情が大きかったように思う。そしてそれをうらみに思う会津人は西南の役に多数参加することになる。このあたりの感情は理解できないでもないが，全面的に同意するというわけでもない。感情的なものが多分にあったにせよ遠く百余年を経た現在の目では，歴史の流れの中でこのようなことも必要ではなかったか，という考えが頭を占める。実際，この本を読んでみて，著者が何を言おうとしているかがよくわからなかった。会津藩の敗北，そして肉親の自殺，下北での，現在の我々の想像を絶する苦労，会津藩出身であるが故の社会へ出て行こうとする時の様々の障害等々，著者の味わった苦難，その悲惨さ，それは十分にわかるが，著者が会津人であるということから脱しきれず，物事すべてそういう面からとらえているように思える。書名は「ある明治人の記録」であるが，「ある会津人の記録」という色が濃いように思った。

---

(2) 近代詩集三種

若菜集

島崎　藤村著　　文庫

明治29年，教師として仙台に落着いた前後の作品51篇を収める。わが国近代詩の確立であり，明治浪漫主義の朝明けを示すものとなった。若々しい情感を日本古来の伝統を生かした西欧的詩体の中にとかしこむ。

3C　　櫛田　芳昭

今，この「若菜集」にざっと目を通してみて，この詩集は女性的な感じがすると思った。

特に最初の「おえふ」から「おきく」までのそれぞれの女性を歌った詩が，女の人の考え方というか，それぞれのスタイルというものを形成していて興味深い。

そのあとに歌われている「草枕」や「春の歌」そして「春の曲」などは，表面的には自分のまわりの環境・自然などを歌っているようであるが，その内容には作者・島崎藤村の生き方，哲学というものが感じられないこともない。

「暗香」から始まる，姉妹の対話形式による一連の詩，これはそれまで制限をうけていた形式を完全に変化させたのではないのだろうか。こんな所がこの「若菜集」が日本近代詩の始まりとされる理由ではないだろうか。

これらの一連の詩のあと，大小さまざまの詩がのっているがどことなく落ちついていないような感じの詩がいくつかあった。

「望郷」という詩と「おくめ」の詩には，とても似ている所がある。恋愛のために前者は寺を，後者は親を捨てた部分である。これらより，近代の生命観，哲学を知ることができるようだ。

この詩集の中で一番印象に残っているのは，後半に収められている「初恋」である。

清純な情感，初恋のイメージ，幼く淡い慕情，など心に響くテーマがたくさんある。

全体的にこの詩集は現代においてはどことなくもの足りない感じで，「やっぱり古い」という感じがするが，その中でも「初恋」は現代人が忘れている「何か」を持っていて，古い新しいの感覚を超えた，すばらしい詩集だと思う。

海潮音

上田　敏訳著　新潮文庫

ボードレール，ヴェルレーヌなどの清新なフランス近代詩を紹介してわが詩壇に根本的革命をもたらした上田敏は，藤村・晩翠ら当時の新体詩に不満をいだき，"一世の文芸を指導せん"との大抱負に発して至難な西欧近代詩を翻訳し，その高雅な邦語をもって独立した創作とも見られる多くの代表的な名訳を残した。

3C　　小池　千春

一番最初の詩，「燕の歌」を読んだとき，まず感じたのは，"美しさ"ということである。文語体であるため完全な解釈は仲々困難ではあるが，この詩の全体のイメージ，一つ一つの言葉がとてもきれいだと思った。この詩集に対してそんな印象をもって，数多くの詩に目を通しているうちに，おもしろいことに気が付いた。

とても美しいと感じさせる詩のほかに，力強いもの，哲学的なもの，ロマンティックなものと様々なジャンルで，収められている詩に一貫性がないということである。

訳者上田敏が，いくら第三者の立場でば出来合いの詩を訳しただけのものとしても，詩の選択は訳者自身であり，そうすれば当然，彼の主観などから，選ばれた詩にある程度のジャンルの片寄りが出てくるだろう。それが何故，このように様々な詩形でまとめられているのか。

これは，最後に解説を読んでわかったことだが，この「海潮音」は新体詩が確立するころに編まれたもので，訳者は単なる内容の移植のみを目的としたのではなく，詩形の研究資料もあわせて提供しようとしていたというのである。つまり，「海潮音」は相当な研究的態度をもって編まれたということになる。このことを理解したとき，"新体詩確立"にあたった彼らの詩に対する情熱を思わないではいられなかった。そして結果的にこの「海潮音」は詩壇に象徴主義をはじめて開花結実するという，重大な意義を残している。

最初に述べたように，全部の詩が文語体ではっきり言って仲々難解であるものがほとんどであったが，その中の印象的だったものの一つで，シャルル・ボドレエル作の「人と海」という詩がある。

こころ自由なる人間は，
　　とはに覚づらむ大海を。
海こそ人の鏡なれ。灘の大波はてしなく，
水や天なるゆらゆらは，うつし心の底にて
底ひも知らぬ深海の潮の苦味も世といづれ。

これは，「人と海」の一連である。

この詩も，一つ一つの語句の意味を正確につかんだ上で印象に残ったというのではない。ただ，海はよく人の心の大きさにたとえられるが，この詩の中で，"海こそ人の鏡なれ"。と表現されているのが新鮮に感じられたことや，この詩のもつニュアンスに背伸びしないで気持がついていくような気がしたことなどから心に残ったのだろう。

本当に，全部の詩をまだまだ読解しておらず，詩集を一冊読み切ったとは言えないが，くり返し，くり返し目を通してもっと多くのものを感じとってみたいと思う。

邪　宗　門

北原　白秋著

明治42年刊。豊富華麗の河藻を繰る幻覚的な表現の中に官能主義と異国情調・切支丹趣味と世紀末思想を含めて，当時詩壇の求めていた情調象徴詩をうち建てた。

3C　竹森美貴男

邪宗門。―もちろん邪教視されたキリスト教への呼称であるが，それは九州を故郷とする白秋の，当時の詩情をかき立てるきわめて自然なイメージであったのではないだろうか。邪宗門の主題的作品でもある邪宗門秘曲には，一貫して異国文明に対する好奇と驚異を表わし，耽美者の強い願望を歌っている。そしてここには，異教への好奇心と幻想を表現するために，故意にポルトガル語の訛が多く使われているようである。又，読み進めていく中で感じたのは，詩中に横文字で書かれてあるのがひんぱんにあることだ。当時の白秋の若いハイカラな感傷が感じられるのではないだろうか。

邪宗門を一読して，ロマンティズムとか，言葉の奇しさというものを誰もが最初に感じるのではないだろうか。神秘的なものに引き込まれる感じである。特殊な音律のものもあるが，五七調のものが多いようだ。その調子が，それぞれの詩をいっそう印象強いものとしているのではないだろうか。時には，穏やかに，時には激しく，又，奇しい調子なのである。白秋は言葉の魔王とまでいわれたそうだが，まさにそのとおりではないだろうか。これほどまでに語をうまく操ることのできる人は，そう沢山はいないにちがいない。

私は白秋のことについて多くは知っていない。ただ白秋を評する人達が皆，「白秋は天才だ。」「言葉の魔王だ。」と言って賞讃するのはわかる気がする。詩人にとって言葉に発する表現は行為のすべてである。その点で白秋は詩人中の詩人といえるのではないか。感情を言葉として表現するのは極めてむずかしく，やっかいなものである。白秋の詩業が達成した言葉の響きの世界は今日の僕達に無限の富を提供してくれるのではないだろうか。

(3) 小松左京のＳＦ

復活の日

角川文庫

吹雪の大アルプスで小型機が墜落した。この飛行機には秘密裏に開発された猛毒性を持つMM菌のカプセルが搭載されていたが，そのカプセルもこわれ，雪の上に散乱していた。春になり雪解けとともに，麓の村では家畜が次々に死んでいった。やがて各地で人びとが倒れ始め，人類滅亡の危機が迫ってきた。著者最高のＳＦ長編小説。

3土　五十嵐　洋

人類はいつの時代にも古い世代から新しい世代へ文化を伝え，発展させる使命を荷ってきた。我々の時代の文化も，そうした人類のたゆまぬ営みの産物にほかならない。現代における自然科学の発達およびその応用としての技術の進歩は驚異的である。それが現代文化の著しい特色を示しているように，自然科学・技術の成果は，人類の生存そのものをおびやかす危機をもたらしている……

科学技術の多くは，軍事研究とともに発達してきたと言っても過言ではないと思う。是非はともかくとして，その事情は現在でも変わっていない。あらゆる先端の技術が，軍事に応用されているのである。しかも，各国の軍事強化は依然として肥大化の傾向を示している。どんな技術が，今注目されているのだろうか。中性子爆弾やビーム兵器の登場，エレクトロニクスの発展，核兵器ミサイルの質的変化など世界の軍事技術の現状は，はたしてどのようになっているのだろうか？

ここ数十年前から世界の科学者たちの目は，しだいに宇宙へと向けられていった。そして，未知の世界への第一歩として，ソ連が人工衛星打ち上げに成功したのである。人工衛星の象徴する科学とテクノロジーの勝利は，もちろん未来への大きな希望の門を開くものであり，我々の大きな希望でもあった。が，それと共に危険の予告でもある。人類の絶滅をも，もたらしかねない大きな危険の予告である。科学技術，とくに巨大なそれは，自らを生み出した社会体制を解体と破滅におとしかねないという恐れを，我々はだれしも心のどこか片隅にもっていることだろう。当時，米ソなど大国においては人工衛星は進歩した科学技術を象徴するものであり，それは，つまり軍事的進歩の象徴として受けとった。それから大国間のはてしない軍事競争への道はますます開かれていったのは当然といえよう。そして，巨大科学競争が米ソの間でたたかわれ，ついに米のＮＡＳＡの演出した今世紀最大のイベント，つまり，二人の宇宙飛行士を乗せた月着陸船イーグルの月面着陸に見事成功したのであった。幼い自分にも記憶こそうすらいでいるものの，その時感じとった何かしらはある。

話はかわって，この『復活の日』では，生物化学兵器として開発された新種の猛毒性をもつ細菌がちょっとした偶発事故から，人類を死の淵に陥れたのである。――とにかく現在は，世界中の科学者の，何十パーセントかが，大量殺人用のいまわしい兵器＝核兵器より数十倍も安上がりで，しかも，航空機散布によって，核兵器同様，あるいはそれ以上の効果をあげうる細菌兵器＝を直接研究している。全世界を疫病から救い出したいと努力しているこの同じ瞬間に，かた方では同業者が，どうやったら確実かつ迅速に，恐ろしい疫病を流行させることができるか，どうやったら，仮想敵国の疫病体系をズタズタにすることができるかという事を，豊富な予算とぜいたくな設備を使って研究している。――相手が持てば，自分も持とうとする。この悪環境は核兵器の場合とまったく同じである。もし仮に，この物語同様，新種の，未知の世界からの細菌が，ある細菌研究所で発見・改良されたまではよいが，そのワクチンが製造できずに，ちょっとした事故で外へもれたら，人類は，世界は何も知らずに死をまたねばならないのか。死との闘いのための学問は一般に解放されているため，だれでも，その貴重な最新の進歩をいくらでも利用できる。しかし，秘密裏につくり出したものの恐ろしさは国防のため，誰にも知らせることができない。……この恐るべき人類の敵に対抗する方法をありとあらゆる人智を総合して研究するのをはばんでいるのは，国家機密というやつなのである。

現代は，自然に対する恐怖がなくなった代わりに，科学それ自身に対する恐怖，あるいは，今のようにエスカレートして恐ろしいものが作られるという，非常な恐怖を生み出している。悪循環というか，矛盾したつまりパンドラの箱がいまの世界に存在している。知的パンドラの箱が開かれてしまったその時「もっともっと」いやおうなく突き進んでいくことが運命づけられる。たとえ破滅が待っていようと。

今回は，感想というより自分の意見を書いてしまった感じである。小松左京という作家は，科学に詳しいせいか，ちょっと自分には，わかりにくく，文章も回りくどい感があり，最後まで読むのに骨がおれた。

第二日本国誕生

3土　空閑　秀雄

私は現代国語の授業のときに，「生活の中の知恵」を読んですっかり魅せられてしまった小松左京の作品を読むことにし，この「第二日本国誕生」を選んだわけである。

まず初めに，全体のあらすじを述べると，ルポライターである主人公は，ひょんなことからもう一つの警察・交通法規・税務署・郵便制度・専売制などがあることがわかり，「第二日本国」の存在に気がつく。職業がら主人公はいろいろと興味をもち，それを知ろうとあちこちかけまわる。そのうちに，どちらがよりよく日本を運営し，国民を満足させ，生きがいある生活を可能にさせるか，第一国家と第二国家の「経営能率サービス戦争」が開始され，主人公は第二国家に属する。しかし，恋をしたことによって，この「ダブル国家」騒ぎなどあまり気にならなくなる。そして，彼女に結婚を申し込むわけだがそのときに，彼女が第一国家に属していることを知る。主人公は彼女に，同じ国家に属するようにすすめるが，彼女は言うことをきかない。そして一言，「だってさー。二人とも別々の国家に属していたら，国際結婚ってことになるでしょ。かっこいいじゃン？」というのである。それを聞いてまったくこのごろの若い女ときたら国家なんて結婚のアクセサリーぐらいにしか考えていやがらないと主人公が憤慨する，といった話だ。

私は，日本の他に別な日本国があって二重になっているという物語そのものは，別に珍しいものではないけれども，別な国に互いが属していたら"国際結婚"ができる，"かっこいいじゃん？"と女にいわせるくだりがなんとなくおもしろかった。しかし，このおもしろさというのは，笑いながらも妙にやりきれぬ隙間風のように冷たいものが背後にさしこんでくるような感じのものだ。そこには，国家というものもアクセサリーの一つにすぎないのではないかという，作者の一歩退いた目があるように思った。

「生活の中の知恵」，「第二日本国誕生」を読んでみて私は，小松左京にはある一つの"もの"を，少し視点をずらして，人の気のつかない問題点をさぐりあてて光をあてようという精神があるように思う。これからも多くの小松左京の作品に触れて，その精神を自分のものにしていきたいと思う。

---

(4)　中野重治の小説

むらぎも

新潮文庫

プロレタリア運動の盛んだった昭和初期，東大に入学した安吉は，左翼的な新人会に近づき，交友の範囲をひろげながら学生運動に入ってゆく。同じ理想と目標のもとに集まってきた青年たちとの関係を中心に，さまざまの出来事を通して，安吉が人生と芸術に眼を開いてゆくいきさつが，きわめて即物的に描かれている。

3土　志賀　雅人

私は，この作品を読んでみて，「石川達三著の『青春の蹉跌』あるいは『薔薇と荊の細道』に，どことなく似たような作品だなあ。」と思いました。『青春の蹉跌』の場合，主人公江藤賢一郎は成績抜群の法律学生でありながら，専攻以外は無知に等しいといったあまり，自分自身を見失ってしまって，一人の女性を妊娠させてしまい，そして，その揚句にその女性を殺害してしまう。といった内容で，また『薔薇と荊の細道』も，男性経験のない主人公塩田伸子が，愛してもいない男にその肉体を任せ，妊娠してしまう。といった内容で共に自分のまわりの人たちのことをあまりにも気にしすぎて失敗するといった感じです。これと同じことが，この作品にも言えるような気がします。例えば，自然のなりゆきとはいえ，自分からすすんで新人会に入会したのではないということです。当時の状況がどうであれ，安吉のとった態度にはあまり感心しません。また，入会してしまったのならその会の会員であるという自覚を持って，積極的に行動をとるべきだと思うのに，そういった姿さえ安吉には見られず，ただ何となくそしていやいやながら会の仕事にたずさわっているように思われました。このように，自分のまわりをあまりにも気にしすぎて失敗するといったことは，現代の社会にもよく見られることだと思います。

この作品には，新人会の会員，大学教授，合宿のおばさんなど，いろいろな人物が出てきましたが，新人会の会員のほとんどが，その人独自の"何か"を持っているように感じられました。新人会の桑原が捕まえてきた少年が，警邏班の一人であったのに，規約を忠実に守って，そのことを名のらなかったのはやはりその少年に彼独自の"何か"があったためだろうと思います。しかし，安吉にはこれがないのではないかと考

えられます。もしこれがあれば，会の仕事も積極的にやるだろうし，また，学生としてきちんと試験も受けるだろうと思います。確かに，安吉はいろいろな出来事を通して，人生や芸術に開眼していきましたが，彼独自の"何か"がないために，他の新人会の会員とは少し段差があるように思いました。

この"何か"とは一体何であるか。それは人個人によって違うはずですが，安吉の場合，それは自覚・積極性などであると思います。私にしても安吉と同じように，積極性があまりない方だと思います。けれども，ある意味では，私にしても，安吉にしても積極性がある方かもしれません。人を見る観点を変えるとそう言えるのだろうと思います。『青春の蹉跌』の江藤賢一郎，『薔薇と荊の細道』の塩田伸子にしても，この"何か"がなかったために誤ちを犯したのだと思います。この"何か"は，人間誰しも持っているもので，この"何か"のために，成功したり，失敗したりしているはずです。そのためにも，人間は，自分自身の"何か"を早く見つけ，それを矯正していかないと，大きな誤ちを犯しかねないと思います。

自分自身の行動に責任を持ち，まわりのことをあまり気にしすぎない。ということを，この作品を読んでみて，私自身，改めて痛感しました。

鉄　の　話　（中野重治全集）

3土　佐々木一則

この話の主人公は，福井県に住む一青年，"鉄"である。鉄が地元の村で起きた水道敷設の問題で，東京に控訴しに来ると偶然，幼な友達に出会い想い出話が始まる。

鉄はなかなかの達筆であり，皇太子殿下の行啓で御前揮毫の栄をになうことになった。

しかし，本来ならばそのような名誉なことを頼まれたのだから光栄なことであろうと思うのだが，この鉄の家は貧乏な小作人であり，ましてやその話が鉄の嫌っている板野先生と大地主の川田から持ち上がったのであるから鉄の家の中は，大騒ぎであった。

鉄と川田の息子は同じクラスであった。ある日，川田の檀那がたまたま授業参観に来ていた。鉄が，川田の檀那は板野先生を自分の息子の嫁にするために見に来ているのだと話しているのを，川田の檀那に聞かれてしまうのである。それからというもの，鉄の身のまわりに不幸なことばかり起きた。年貢米は，鉄の兄貴の必死の説得にもかかわらず不合格にされ，病弱であった兄貴が死んでしまう。

そして，いよいよ御前揮毫の日がやってきた。いざ会場に着き，筆にトップリと墨を含ませて大きな白い紙に「義勇公ニ奉ジ」と書こうとすると，その白い紙には鉛筆でうっすらと下書きがしてあったのである。ペテンにかかったのである。鉄はその場にたおれ，重大な任務がはたせなかった。そして，川田は県会議員を止め，校長は更迭した。当然のことながら鉄一家は村を出ていくことになってしまった。その後，鉄のお袋が首を吊り，父も老衰で死んだ。

ようするに鉄一家は，鉄の御前揮毫によって，めちゃくちゃにされてしまったわけである。あたりさわりなく，ごく平凡に暮らしていた鉄一家に，一つの重大事が舞い込んできたがために一家崩壊にまでされた鉄の気持は，ただごとではないだろうと思う。一つだけ不思議に思ったのは，だれがその大きな白い紙に下書などしたのかということである。もし川田が仕組んだのだとすれば，自分の県会議員という役職まで犠牲にして，鉄に失敗させたかったのかということが疑問である。

この話を読んで，人間の逆恨みというものは恐しいものだとつくづく感じ，御前揮毫によって一家崩壊に追いやられた鉄がたいそうふびんに思えた。

---

(5)　山　月　記

中島　敦著　　各文庫

唐時代，せっかくエリートコースに乗った秀才が，「臆病な自尊心と尊大な羞恥心」を心内に飼いふとらせた結果，自意識の強い孤絶感にとらわれ，ついに発狂して虎に化す。芸術にとりつかれた人間の悲劇。

2C　大内　和蔵

この「山月記」を読んで，最初に思った事は，人間が虎になるという現実にはあり得ない話の節についてです。精神病患者で極めて特異なケースで，自己暗示によって，自らを他の生命体と信じてしまう，という事は，以前，耳にしたことはありましたが，この作品のように，外見まで変化するような事はあり得ず，ここに，作者中島敦文学の重要な部分をなす，中国の古典その他の伝説に取材した作品の長所があると思う。なぜなら，表現方法が，漢文直訳体・文語体であり，

全体として，掲い文体となっており，読者へ与える印象が強くなっていると思います。

第二に思った事は，明確な手法・確実な表現・豊かな想像力を駆使した情景描写や表現についてです。特に印象に残る場面は，虎になった李徴が哀傷の前に現われた所，李徴が虎になった時の描写，そして，最後に，虎李徴が故人哀傷の一行に，再び姿を現わした時の描写，これらの場面は，中島敦の作風のすばらしい面が数多く，漢語の使用などにより先に述べたように，印象を深め，そして，私のような平凡な読者でも，その場面を十分に想像できるのだと思います。

第三には，主人公李徴の生き方が，あまりにも近代・現代人にありがちなものであるということです。李徴の性格や心理は，文中に繊細に描かれている。「李徴は博学才頴」「性狷介，自ら恃むところすこぶる厚く，賤吏に甘んずるを潔しとしなかった」とは，近代人の意識過剰を表わしていると思う。また，「考えようによれば，思い当たることが全然ないでもない。……おれの毛皮のぬれたのは，夜露のためばかりではない。」この部分は，李徴がもはや絶望的な自分を発見し，自分の過去をかえりみている所であると思います。そして他の部分では，「いったい，獣でも人間でも，元は何かほかのものだったんだろう。……初めから分の形のものだったと思い込んでいるのではないか。」この文章は，人間という生命体，それ自体の存在さえも疑問視している。前者の絶望的な自意識を分析，そして後者の人間存在の不条理の追求，この二つの事は，近代人の生き方に合っていると思います。

そして，作者中島敦が主題として，真に読者に訴えたい事は，少なくとも，前者の自意識分析であると思う。なぜなら，近代の人間は自ら自分を分析しようとしない事が多いからであり，敦は，それを警告しているのだと思います。

この作品の中で敦はまた，詩人李徴に，作家中島敦を描いていることも確かだと思う。敦もまた，その生涯は不遇であったからです。

２Ｃ　蛭田　　忍

人間が虎に変身するなどという非現実的なことは，とても信じられない。しかし，この「山月記」という中国風の奇妙な小説を読んでいると，決して小説にすぎない，と言いきれそうにないように思う。人間が無我無中で野山を駈けずり回って，いつの間にか四本の手足で歩いていた。なんてこともありうるかもしれないではないか。

でも，なぜ筆者中島敦はこの李徴という男を虎という獣に変身させてしまったのだろうか。別に中国だから虎ということもないだろうと思う。ぼくだったら，そう，可愛らしいパンダにでもしてやったろうに。それに，虎が人間の言葉を話すというところがまたおもしろい。あの犬のような猫のような口でどうして人間の言葉が話せるだろうか。おそらく，中島敦はそこまで考える余地がなかったんだろう。

ところで，この中島敦は，この山月記で何を語ろうとしたのか，そして，この山月記とはどういう意味なのか。ぼくは，この李徴がなぜ虎という異類の生き物になってしまったのか，その理由の中に筆者の言いたいことがかくされているような気がした。

そもそも，李徴が虎などに変わってしまったのは，ぼくが思うには，人にはほめられ，尊敬されることが李徴にとっては，逆に恥かしいという気持ちになってしまう。そのため極力，人との交際を断ち山にこもるという臆病なところがあったからだと思う。そうして，人間界という世界からおのずと遠ざかったために，人間離れしてしまったためだろう。もし，これらのことがほんとうに李徴が虎に変身してしまった原因であるならば，作者は，この李徴のように人を避け，人間社会をも遠のくようになると，その人間は人間としての価値がなくなってしまう。ということを言いたがっているのではなかろうか。とぼくは思った。

それから，この「山月記」という言葉の意味だけど，それは，虎に姿を変えてしまい，人間との接触をとざされてしまった人間李徴が悲しさをだれかに訴えようとして月に向かってほえることからこの小説の題となったのだろう。

新着図書目録

◆印は図書館。他は各教官の研究室に所在するものを分類別受入順に記載

総　　記

日本の図書館　1979年　日本図書館協会◆
現代用語の基礎知識　自由国民社◆
図書委員ハンドブック
全国学校図書館協議会◆
学び方の技術高校生の図書館利用法
日本書院◆
福島県民百科　福島民友新聞◆
福島民報縮刷版　昭和55年1月～4月号
福島民報社◆
朝日新聞縮刷版　昭和55年2月～4月号
朝日新聞社◆
いわき市史11　近代資料Ⅱ　上　いわき市◆

東洋文庫
373　東洋遍歴記3　平凡社◆
374　今昔物語集　同◆
375　甲子夜話　続篇4　同◆
376　ラーマーヤナ1　同◆
377　燈宮日録5　同◆
378　本朝食鑑4　同◆

アメリカ古典文庫
1　ベンジャミン・フランクリン　研究社
3　日本人のアメリカ論　同
16　アメリカ革命　同

東京大学公開講座
19　エネルギー　東京大学出版会◆

世界の名著
1　バラモン教典　原始仏典　中央公論社◆
2　大乗仏典　同◆
3　孟子　孔子　同◆
4　荘子　老子　同◆
6　プラトンⅠ　同◆
7　同　Ⅱ　同◆
8　アリストテレス　同◆
9　ギリシアの科学　同◆
10　諸子百家　同◆
11　司馬遷　同◆
12　中国の科学　同◆
13　聖書　同◆
16　アウグスティヌス　同◆
17　コーラン　同◆
18　禅語録　同◆
19　朱子　王陽明　同◆
21　マキアヴェリ　同◆
22　エラスムス・トマスモア　同◆
23　ルター　同◆
24　モンテニュー　同◆
25　ベーコン　同◆
26　ガリレオ　同◆
27　デカルト　同◆
28　ホッブズ　同◆
29　パスカル　同◆
31　ニュートン　同◆
32　ロックヒューム　同◆
33　ヴィーコ　中央公論社◆
35　ヴォルテール　ディドロダランベール　同◆
36　ルソー　同◆
38　ヘンダーゲーテ　同◆
39　カント　同◆
42　オウエン　サンシモンフーリエ　同◆
44　ヘーゲル　同◆
45　ショーペンハウアー　同◆
48　ミシュレ　同◆
49　ベンサム　J.Sミル　同◆
50　ダーウィル　同◆
51　キルケゴール　同◆
52　ラスキンモリス　同◆
53　プルードン　バクーニン　クロポトキン　同◆
56　ブルクハルト　同◆
57　ニーチエ　同◆
58　デュルケーム　ジンメル　同◆
60　フロイト　同◆
61　ウエーバー　同◆
63　レーニン　同◆
64　ベルクソン　同◆
66　アラン　ヴァレリー　同◆
67　ホイジンガ　同◆
68　マンハイム　ホルテガ　同◆
69　ケインズ　ハロット　同◆
70　ラッセルウィトゲンシュタイン　ホワイトヘッド　同◆
73　トインビー　同◆
74　ハイデガー　同◆
76　ユングフロム　同◆
77　ガンジ　ネルー　同◆
79　現代の科学Ⅰ　同◆
80　同　Ⅱ　同◆
81　近代の芸術論　同◆

中国文明選
1　資治通鑑　朝日新聞社
2　蘇東坡集　同
3　朱子集　同
4　近思録　上　同
5　同　下　同
7　顧炎武集　同
13　文学論集　同

人類の知的遺産
8　アリストテレス　講談社◆
28　ガルヴァン　同◆
55　ケアハーディ　同◆

岡倉天心全集
1　東洋の理想　原書房◆
3　評論　意見書　同◆
5　日記　旅行日誌　同◆

長澤規矩也
古書のはなし　富山房

岡田武彦
劉念台文集　中国古典新書　明徳出版

高田宏　本のある生活　新潮社◆

豊田武編
東北の歴史　下　吉川弘文館◆

哲　　学

新聖書大辞典　キリスト新聞社
鍵非子　筑摩書房
ルソー全集13　白水社◆

諸橋轍次
中国古典名言事典　講談社

村治能就編
哲学用語辞典　東京堂出版

町野和嘉
SINAI聖書の旅モーセの足跡を追って
平凡社

相良亨　江戸の思想家たち　上・下　研究社◆

宮坂宥勝
密教への誘い　人物往来社◆

見田石介
ヘーゲル大論理学研究1～3　大月書店◆

A.J.エイヤー
ラッセル　岩波書店◆

廣川洋一
プラトンの学園アカデメイア　同◆

南　博　人間行動学　同◆

玉井茂　ソクラテスの妻「哲学夜話」　合同出版◆

寺松渉他
哲学に何ができるか　朝日出版社◆

岸田秀他
哺育器の中の大人　同◆

大内秀明他
マルクスを読む　同◆

河合隼雄他
魂にメスはいらない　同◆

宮城音弥他
何が性格を作るか　同◆

増谷文雄他
親鸞　同◆

A.ボイムラー
生成の無垢1　似文社◆

渡部正一
日本古代中世の思想と文化　大明堂◆

白川義員
新約聖書の世界　小学館

原秀三郎
日本古代国家史研究　東京大学出版会

中村元他
濁世の仏教　朝日出版社◆

バジル・ウイリー
イギリス精神の源流　創元社

大木英夫
歴史神学と社会倫理　ヨルダン社◆

世界宗教叢書
4　ユダヤ教史　山川出版
7　仏教史1　同

日本思想大系
31　山崎闇斎学派　岩波書店

仏教思想史
1　神と仏　源流をさぐる　平楽寺書店

日本哲学思想全書
5　唯物論篇　平凡社◆
6　自然篇　同◆
7　学問篇　同◆
8　宗教論一般篇　同◆

飯島宗享編
キルケゴール講話遺稿集3,5～7
新地書房◆

アウグスティヌス著作集
1　初期哲学論集1　教文館
2　同　2　同
4　神学論集　同
7　マニ教駁論集　同
9　ペラギウス派駁論集1　同

村上重良

Japanese Religion in the Modern Century　東京大学出版会

歴　史

世界歴史地図　朝日新聞社
世界地図帖　国際地学協会
下村寅太郎
光があった　朝日出版社◆
森浩一　古代人の伝言　同　◆
C. ゼーリッヒ
アインシュタインの生涯　東京図書◆
フリュキガー
青春のアインシュタイン　同　◆
アインシュタイン
自伝ノート　同　◆
R.W. サザーン
ヨーロッパとイスラム世界　岩波書店
藤井甚太郎
概説　明治文化史 I　原書房◆
野口武彦
江戸の歴史家　筑摩書房
秀村欣二編
西洋史概説　東京大学出版会◆
山本達郎
岩波小辞典　世界史－東洋－　岩波書店
菊池昌典編
ソビエト史研究入門　東京大学出版会◆
シテクリ
ガリレオの生涯　東京図書◆
C. ゼーリッヒ
アインシュタインの生涯　同　◆
O. オア　アーベルの生涯　同　◆
ダニングトン
ガウスの生涯　同　◆
デュピュイ
ガロアその真実の生涯　同　◆
A. ダルマス
青春のガロア　同　◆
大村喜吉
斉藤秀三郎伝　吾妻書房
山口百々男
和英日本文化辞典　ジャパンタイムズ
亀井俊介
自由の聖地　研究社
河部利夫編
新版世界人名辞典　東洋編　西洋編
東京堂出版◆
流域をたどる歴史
1　総論　北海道編　ぎょうせい◆
2　東北編　同　◆
3　関東編　同　◆
4　中部編　同　◆
5　近畿編　同　◆
6　中国・四国編　同　◆
7　九州編　同　◆
旗弘道　概説日本史　有斐閣◆
日本歴史地名大系
5　秋田県の地名　平凡社◆
42　佐賀県の地名　同　◆
人物現代史
13　現代史のルーツ　講談社◆
日本の山河
18　天と地の旅　和歌山　国書刊行会◆
23　天と地の旅　滋賀　国書刊行会◆
日本庶民生活史料集成
28　和漢三才図会（一）　三一書房◆
三澤勝衛著作集
1　郷土地理研究　みすず書房
2　風土論 1　同
3　同　2　同
明治文化史
5　学術　原書房◆
6　宗教　同　◆
10　趣味娯楽　同　◆
11　社会経済　同　◆
12　生活　同　◆
13　風俗　同　◆

社会科学

技術系国家公務員上級試験総合専門教養問題の解答例　近代図書
経済学大辞典 1　東洋経済新報社◆
ウォーリン
西欧政治思想史 1,3～5　福村出版◆
有賀秀春
ファイリング読本　学事出版◆
加藤秀俊
文芸の社会学　PHP研究所◆
石田久夫
山鹿素行兵法学の史的研究
玉川大学出版部
バリーリチ
ドイツ参謀本部　原書房
伊藤健三
英語指導法ハンドブック 1　大修館書店
羽鳥博愛
同　2　同
平岡昇　ひとなぜ怒りを籠う　朝日出版社◆
大野正男
フィクションとしての裁判　同　◆
ジョン.A. ベケット
人間尊重の経営システム　日刊工業◆
ルイス.T. レイダー
未来経営への挑戦　同　◆
山本七平
日本資本主義の精神　光文社
稲村博　わが子と教え子を自殺から守る十章
大修館書店
倉澤剛　幾学校令の研究　講談社
ブルーバックス
407　働き方の科学　同　◆
講座日本民俗宗教
2　仏教民俗宗教　弘文堂◆
会田雄次著作集
1　アーロン収容所，アーロン収容所再訪
ヨルダン社◆
2　日本人の意識構造　事実と幻想　同　◆
3　日本人の風土と文化　超越者の思想
同　◆
4　決断の条件　日本人材論　同　◆
7　男性待望論　夫の論理妻の論理　同　◆
8　ヨーロッパヒューマニズムの限界
同　◆
宮原誠一他
資料日本現代教育史 1～4　1945～1973
戦前　追補 1974～1979　三省堂
世界の地理教科書シリーズ
23　中国　帝国書院
24　韓国　同
25　マレーシア　同
26　ナイジェリア　同
27　スペイン　同
28　スウェーデン　同
29　ペルー　同
30　アルゼンチン　同

自然科学

高速液体クロマトグラフィーデータ集
アイピーシー
常用化学定数表　廣川書店◆
化学実験ハンドブック　技報堂出版◆
理科年表　昭和55年　丸善◆
分析化学反応の基礎　培風館◆
日本の活断層　東京大学出版会
高分子電解質　共立出版◆
E. クライツィグ
数理統計学 1,2　培風館◆
田代嘉宏
確率と統計要論　森北出版◆
佐藤伊助
いろいろな曲線と曲面　裳華房◆
矢野健太郎
立体解析幾何学　同　◆
栗田稔　座標　同　◆
松本誠　計量微分幾何学　同　◆
小林昭七
曲線と曲面の微分幾何　同　◆
青木利夫
統計学要論　培風館◆
安藤洋美
ベクトル解析入門　現代数学社◆
ラッヘンブルック
判別分析　同　◆
鈴木七緒編
詳解確率と統計演習　共立出版◆
益田義賀
固体物理学　東京大学出版会
中嶋貞雄
超伝導入門　培風館
吉田重知
物性電子物理学　朝倉書店
桜庭一郎
電子物理学　同
河口至商
多変量解析入門 I, II　森北出版
今西錦司他
ダーウインを超えて　朝日出版社◆
渡辺格他
生命をあずける　同　◆
小尾信弥他
宇宙との対話　同　◆
日高敏隆
本能のジュークボックス　同　◆
根本順吉
病める地球　ガイアの思想　同　◆
萩野一善
熱力学入門　岩波書店◆
クリチェフスキー
熱力学の話　東京図書◆

井田幸次郎
やさしい熱力学　東京図書
ブリッジマン
熱とエントロピー　同
ゲリフェル
熱とはなにか　同
エリ.デ.ランダウ
相対性理論入門　同
アベリヤノフ
わかる相対性理論　同
W.ギート
工科系のための熱物理学1,2　みすず書房
バウリ　熱力学と気体分子運動論　講談社
森東夫　熱力学概論　裳華堂
近藤次郎
微分方程式フーリエ解析　培風館
A.D.バイエルヘン
ヒトラー政権と科学者たち　岩波書店
上田隆　有機量子化学演習　廣川書店
J.Edwards
無機反応の機構　化学同人
E.J.Hawas
プログラム学習　NMR入門　講談社
竹内敬人
基本化学　廣川書店
田島義雄
化学の基本　同
ストライト・ウイーザー
有機化学解説1～3　同
日本化学会編
海洋天然物化学　学会出版センター
竹内一夫
タンパク質　朝倉書店
江上不二夫
炭水化物　同
R.トム 構造安定性と形態形成　岩波書店
P.B.ドレイン
無機化学入門　培風館
岩倉義男
反応性高分子　講談社
Henry Bauer
電極反応　東京化学同人
松浦良平
やさしい化学熱力学の解説と演習
廣川書店
大内護一
誰にでもわかる化学熱力学　同
化学実験操作法便覧編集委員会編
化学実験操作法便覧　誠文堂新光社
増訂化学実験事典　講談社
実験化学便覧編集委員会編
実験化学便覧　共立出版
レイドラー
化学の基本　廣川書店
A.S.ベアマン
水はみんなのもの　東京化学同人
日本化学会編
日本の化学百年史　同
藤森利美
化学者および化学技術者のための実験計画法　上　下　同
石川馨　化学者および化学技術者のための統計的方法　同
C.Brooks
化学者および化学技術者のための数学と統計学　同
広田栄治編
化学者のための基礎数学　南江堂
金原寿郎編
大学演習　一般物理学　裳華房
中村誠太郎編
ノーベル賞講演物理学4　講談社
鳴海元　物理学の歩み　培風館
J.ウィーカー
ハテなぜだろうの物理学1　同
H.R.Hulme
核融合　共立出版
吉川庄一
核融合入門　同
平山嘉　図学　培風館
奥村清編
地学の調べ方　コロナ社
K.A.シェンチンガー
アニリン－科学小説－　法政大学出版局
P.R.Brown
高圧液体クロマトグラフィー
東京化学同人
赤岩英夫編
定量分析化学実験　丸善
日本化学会編
化学便覧　応用編　同
紀本和男編
基礎物理学講義Ⅰ Ⅱ　学術図書
W.メヒトル
身近な物理学　講談社
エンジニアリングサイエンス講座
9　量子工学　共立出版
現代天文学講座
13　天体観測セミナー　恒星社厚生閣
新物理学シリーズ
3　振動論　培風館
8　電気伝導　同
無機化学シリーズ
1　無機化学入門　同
実験物理学講座
12　温度と熱　共立出版
26　放射線　同
27　原子核　同
29　原子炉　同
物理工学実験
1　物理実験者のための13章
東京大学出版会
2　半導体技術　上　同
3　同　下　同
5　薄膜の基本技術　同
9　放射線計測技術　同
10　X線回折技術　同
現代化学
3　酸塩基と酸化還元　12光と分子　上
岩波書店
4　化学変化の速度と平衡　上　14物質の合成　上　同
モノグラフ新書
1　演習客観テスト数1　科学新興社
2　演習行列　同
3　演習図形と式　同
4　演習3角関数　同
5　演習図形とベクトル　同
6　演習数列と級数　同
7　演習微分方程式　同
8　演習整数　同
9　演習不等式　同
10　演習微積分1　同
11　同　2　同
12　演習外国の問題　科学新興社
13　演習方程式　同
モノグラフ
30　集合と構造　同
31　空間図形　同
32　記号と演算　同
33　数と話　同
34　微分　同
ポケット数学
1　極限と連続　現代数学社
2　偏微分の考え方　同
3　重積分　同
4　線型空間の線型写像　同
谷崎義郎
有機工業化学　培風館
橋本尚　素器の科学　講談社
村上陽一郎
新しい科学論　同
堀淳一　エントロピーとは何か　同
長谷川博一
宇宙線の謎　同
石戸忠　実践的植物検索小図鑑　秋・冬・春　同
有沢誠　パズル思考法　同
澤田龍吉
超高層空間の謎　同
矢野健太郎
数学質問箱　同
毛利茂男
日曜日の気象学　同
東　昭　生物の泳法　同
磯部秀三
なにがオリオン大星雲で起こっているか
同
米山正信
化学ぎらいをなくす本　同
砂原茂一
ただしい治療　あやしい治療　同
宮原孝四郎他
触媒とは何か　同
都筑卓司
四次元問答　同
B.P.トーキン
植物の不思議な力　同
高田誠二
単位と単位系　物理学 one pint 8
共立出版
Lamberto Cesari
Surface Area　Kraus
S.M.Sze
Physics of Semiconducton Devices　Wiley

工学・技術

機械図集ポンプ　日本機械学会
機械図集ベルトおよびチエーン　同
機械図集軸継手　同
機械図集すべり軸受　同
機械工学SIマニュアル　同
昭和55年度電子通信学会総合全国大会講演論文集　分冊1～8　電子通信学会
ガスタービンに於ける振動騒音の測定と解析及び減少対策　学会サービスセンター
電気工学Ⅱの演習　上　昭晃堂

昭和55年電気学会全国大会講演論文集
ＩＣ応用ハンドブック　昭晃堂
テスタ電圧計発振器の使い方
日刊工業新聞社
強化プラスチックハンドブック　同
エレクトロニクスにおける信頼性
電子通信学会
エレクトロメカニカル機能部品　電気学会
随筆集技術の挑戦者　第１～４集
日本工業出版
土木用語辞典　技報堂出版
マイクロコンピュータハンドブック
朝倉書店
琵琶湖流水図誌　東洋文化社
ＪＩＳハンドブック製図　1980
日本規格協会
橋　1978～1979　土木学会
日本土木建設業史　技報堂
トンネル工事用機械ハンドブック　上　下
日本トンネル技術協会
東京港トンネル工事誌　土木学会
ポンプその設備計画　運転　保守　丸善
トンネル　アメリカ合衆国を中心としたトンネル技術の現況　森北出版
マイクロコンピュータＺ80ハンドブック１
シャープ
マイクロコンピュータＺ80アプリケーションマニュアル
エレクトロニクスダイジェスト社
マイコン読本　同
製図のかき方　近代科学社
コンピューター用語辞典　コロナ社
ＦＯＲＴＲＡＮ規約　同
実例20で知るマイクロコンピュータの活用法　技術評論社
日本建設機械要覧　1980年版
日本建設機械化協会
土木機材事典　産業調査会
藤木武助他
伝熱学概論　文献社◆
近森徳重
パッキンとシール　日本工業出版◆
鈴木春義
最新溶接ハンドブック　山海堂◆
井伊谷鋼一
プロセス制御の基礎　朝倉書店◆
池田芳郎
翼並に水力機の理論　現代工学社◆
堀米孝編
太陽熱発電技術読本　オーム社◆
林　泉　電力系統　昭晃堂◆
高橋清　電子物性　同　◆
吉田梅次郎
半導体物性工学　同　◆
高橋清　太陽光発電　森北出版◆
廣木義廣
電気工学の基礎　上　下　明現社◆
電気工学Ⅱ　電子工学編
東京電機大学出版局◆
生田晴弘
電気工学１の演習　上　下　昭晃堂◆
中山正和
創造性の自己発見　講談社◆
近藤次郎
安全を設計する　同　◆
E.デボノ
発明発見小事典　同　◆
ヴァン・ルーン
発明ものがたり　法政大学出版局◆
猪狩武尚
電気機械学　コロナ社
日本太陽エネルギー学会編
太陽エネルギー基礎と応用　オーム社
佐野一雄
最新電気機器と演習（１）　昭晃堂
佐藤則明
電気機器とパワーエレクトロニクス　同
上田実　電気機械とエネルギー変換工学　同
小川敏　量子エレクトロニクス　同
桜庭一郎
量子電子工学　森北出版
田中哲郎
電気材料科学　誠文堂新光社
北川賢司
信頼性工学入門　コロナ社
林毅編　複合材料工学　日科技連
電子通信学会編
電子通信部品　コロナ社
電子通信材料　同
半導体電子工学　同
菅野卓雄他
表面電子工学　同
前田敬二
光電変換デバイス　同
北川賢司
信頼性の考え方と技術　同
吉川弘之
信頼性工学　同
森崎寿夫
過度現象と及形解析　東海大学出版会
木俣守彦
近代電気物理学　電気書院
又来英　電気理論問題の解き方１，２　コロナ社
住谷哲　電気理論の基礎と演習１～３　同
中澤仁　電気工学（Ⅲ）トレーニングノート　上
若山芳三郎
コンピュータの基礎６　啓学出版
鈴木清　エレクトロニクスの基礎２　同
若山芳三郎
電気の理論１　同
井上治男
電気理論のまとめ　同
若山芳三郎
やさしい電気と電子の理論　同
原正人　これでわかった電気の理論　同
田中謙一郎
初めて学ぶ人のための電気の理論１
オーム社
村田愛祐
同　２　同
秋富勝　図解電気の理論　東京電気大学出版局
大熊栄作
電気理論の入門　同
電気の理論　同
最新初等電気　同
緒方興助
図解電気の基礎理論　近代科学社
村山順一郎
解説と演習　電気理論Ⅰ，Ⅱ　コロナ社
電気理論Ⅰ，Ⅱ　学習の手引付　電気学会
横田成昭他
基礎電気工学　日刊工業新聞社
金古重　電子回路　オーム社
堀重雄　電気理論１　同
牧野秀雄
電気理論２　オーム社
電気工学　電気計測編
東京電気大学出版局
同　交流回路編　同
同　電気磁気　直流回路編　同
菅野卓雄
半導体の物性と素子１　昭晃堂
皆川妙武良
電気応用読本　東京電気大学出版局
電気工学Ⅱ　電気機器編１，２　同
谷下市松
太陽エネルギーの利用　恒星社◆
加藤一郎
過度現象論演習　学献社
山田剛二
地すべり斜面崩壊の実態の対策　山海堂
斉藤義治
改訂新版建設機械施工法　朝倉書店
新ベルトコンベアの計画と管理　白亜書房
鳥海右近
図解鋼橋架設計算例　現代理工学出版
随筆集技術の挑戦者　第１～第４集
日本工業出版
土木技術者のための工事測量（初級編）
土木施工管理技術研究会
F.W.ビューフェ
コンピュータによる骨組構造解析　培風館
土木学会編
土木工学における数値解析　サイエンス社
杉山錦雄他
土木情報処理　コロナ社
島田静雄
合成桁の理論と設計　山海堂
トラス橋の理論と計算　同
吉町太郎一
鋼橋の理論と計算　石崎書店
松本嘉司
土木解析法１，２　技報堂出版
近藤次郎
数学モデル　丸善
竹内敏雄
塔と橋　弘文堂
土木学会編
構造力学公式集　土木学会
化学研究会編
無機基礎製造化学演習　廣川書店◆
小田良平
高分子ファインケミカル　講談社◆
伊保内賢
選ぶ　造る　使う　工業調査会
神谷佳男
石炭重質油　その化学と応用　講談社◆
北原文雄他
界面活性剤　同　◆
土木試験問題研究会編
土木就職試験問題解答集　学陸社◆
伊藤実　考え方　解き方　土木就職試験問題集
工学出版◆
土木技術研究会編
改訂版土木就職試験の解答例　近代図書◆
菅野卓雄編
ＭＯＳ電界効果トランジスタの応用
日刊工業新聞社
北川一雄
リレー回路実験と工作マニュアル
オーム社

大西清　JISにもとづく標準製図法　理工学社
H. シュトラウブ
建設技術史　鹿島出版社
小竹秀雄
トンネル工事用機械　山海堂
吉賀義亮
マイクロコンピュータによるBASIC
工学図書
土木学会編
日本の土木地理　土木学会
鈴木忠義
サービス施設と道路景観工学　技術書院
赤崎正則
基礎高電圧工学　昭晃堂✤
前川太市
電気理論1,II　学芸出版✤
テレビジョン学会編
レーザーの基礎と応用　昭晃堂✤
電気教育図書研究会編
電気工学問題及び解答　森文館✤
J.M. ケイ
流れ学　培風館✤
D.G. Jones
化学と化学工業　東京化学同人✤
高橋正雄
工業電解の化学　アグネ✤
日本化学会編
実験室廃棄物処理指針　丸善✤
大岳望　物質の単離と精製　東京大学出版会✤
E.C. ヘンリー
電子セラミックス　東京化学同人✤
R.T. ウェンドランド
新しい世界を切開いた石油化学工業　同　✤
G. アレクサンダー
シリカと私　同　✤
B.H. バッサス
化学と医学のための電子工学　講談社✤
日本化学会編
放射性物質　丸善✤
村山良丸
トンネル歴史1～3　土木工学社
わが国におけるトンネル掘進機の実績と
展望　同
土木学会編
土木技術者のための岩盤力学　土木学会
日本建設機械化学協会編
地下連続壁土法設計設工ハンドブック
技報堂出版
土質工学会編
掘削用機械特殊な掘削　土質工学会
掘削のポイント　同
E. イザクソン
トンネル技術者のための岩盤力学入門
鹿島出版会
木村孟郎他
内燃機関　丸善
堀住堅司
新版自動車整備入門動力伝達装置　山海堂
土木学会編
海外建設工事の契約仕様　土木学会
安井澄夫
ターボ機械　理論と設計の実際
実教出版✤
表川浩平
コンデンサー　日刊工業新聞社✤
堀狩武尚
電気機械学例題演習　コロナ社✤
近藤建三
電気機械とその応用3　培風館✤
若山芳三郎
エレクトロニクスの応用　同　✤
中山秀太郎
機械の再発見　講談社✤
須田教明
最新測量学1,II　森北出版
T.G.Hicks
技術論文の書き方　近代科学社
澤田益亮
製図器具と製図技法　三共出版
内藤幸造
現代測量の実務　理工図書
土橋忠則
測量計算の基礎演習　東洋書店
春日屋伸昌
測量学演習1,2　学献社
金田弘　電子計算機1,2　コロナ社
木村久男
改訂FORTRAN基本演習　同
丸安隆和
曲線のあてはめと工事に関する測量
技報堂
測量と数学との関連例　同
道路工事に必要な測量の進め方　1道路
一般　同
同　2クロソイド曲線の計算に関して
同
同　3基準点測量とクロソイド曲線の計算
に関するフローチャート　同
西村経二
国土の調査手法　山海堂
建設工事環境対策研究会編
建設工事環境対策ハンドブック
技術資料センター
森田義郎
有機工業化学　培風館✤
荻野圭三
合成洗剤の知識　幸書房✤
矢部章彦他
新版染色概説　光生館✤
白戸敏平編
化学工学　丸善✤
松本十九
新塗料辞典　技報堂✤
水科篤郎
化学工学概論　産業図書✤
小林清志
工業熱力学　理工学社
河井章好
鋼製ラーメン橋脚の設計と解説　同
橋口健市
自動車の辞典　朝倉書店
赤木新介
交通機関論　コロナ社
L.G. リッチ
環境システム工学入門　産業図書
椎貝博美
土木技術者の流体力学　森北出版
井口昌平
川を見る　東京大学出版会
多谷虎男
力学におけるテンソルと変分解析　上
学会出版センター
山口勝也
詳解電気回路過度現象演習　オーム社
西尾出他
コンピュータウォーズ Lecture Book
第II期1　朝日出版社✤
朝倉土木工学講座
1　測量学I,II　朝倉書店
わかり易い土木講座
4　応用力学1　彰国社✤
10　コンクリート工学1　施工　同　✤
11　同2　設計　同　✤
工業化学基礎講座
9　化学工学1　単位操作　朝倉書店✤
11　化学工学実験法　同　✤
土木工学大系
10　材料工学(II)　彰国社✤
12　計画論　同　✤
15　設計論　同　✤
26　交通(II)　同　✤
新体系土木工学
6　弾性体の力学　技報堂出版✤
8　構造物の非弾性解析　同　✤
10　構造物の振動解析　同　✤
22　密度流の水理　同　✤
28　コンクリート材料　同　✤
33　鉄筋コンクリート構造物の設計と施工
同　✤
45　基礎工構造物の基礎　同　✤
46　基礎工(II)　同　✤
52　土木計画のシステム分析　同　✤
53　地域計画(I)　同　✤
62　道路(II)　同　✤
63　同(III)構造　同　✤
66　鉄道(I)　同　✤
67　同(II)　同　✤
70　トンネル(I)山岳トンネル　同　✤
85　海洋施設の設計と施工　同　✤
87　環境保全(II)環境の制御管理　同　✤
91　廃棄物処理　同　✤
94　エネルギー施設(II)火力原子力発電
都市ガス　石油精製　同　✤
98　土木工事管理　同　✤
G.P.Cherepanov
Mechanics of Brittle Fracture
Mc Graw－Hill
John Allison
Electronic Integrated Circuits 同
Gordon J.Deboo
Integrated Circuits and Semiconductor
Devices Theory and Application 同

産　業

遠藤一夫
資源の風景　講談社✤
高辻正基
植物工場　同　✤
尾留川正平
農業地域形成の研究　二宮書店
松浦四郎
国際単位系SIの手引　日本規格協会

芸　術

スポーツ用語辞典　成美堂出版
石河利寛他編
スポーツ医学　春林書院
ラッセルナイ
アメリカ大衆芸術物語　1 気楽な美の神　研究社
同　2 エンタテインメントの世界　同
同　3 ひろがりゆく音と映像　同
武満徹　音　ことば　人間　岩波書店✠
浮世絵聚花
8　フォッグ美術館　ネルソン美術館　小学館✠
日本古寺美術全集
12　教王護国寺と広隆寺　集英社
15　平等院と南山城の古寺　同
16　中尊寺とみちのくの古寺　同
新修日本絵巻物全集
29　地蔵菩薩霊験記絵　矢田地蔵縁起絵　曼荼羅寺縁起絵　角川書店

語　学

日本英語教育協会編
英検合格のための2級実用英語教本　日本英語教育協会✠
実用英語検定2級全問題集　同　✠
あらかわそおべえ　✠
外来語辞典　角川書店
小川芳男
私はこうして英語を学んだ　TBSブリタニカ
樋口忠治
これからのドイツ語　郁文堂
広永慶三郎編
時事英語辞典　研究社
新村出編
広辞苑　岩波書店
福山恰編
海外暮らしの用語事典　ジャパンタイムズ
朱牟田夏雄他
英語研究法　研究社
斉藤秀三郎
斉藤和英大辞典　名著普及会
同　前置詞用法詳解　吾妻書房
代名詞用法詳解　同
副詞接続詞詳解　同
動法時制詳解　同
形容詞用法詳解　同
準動詞用法詳解　同
冠詞用法詳解　同
動詞構文詳解　同
助動詞用法詳解　同
名詞用法詳解　同
英語教育学研究ハンドブック　大修館書店
最新フミ編
英語類義語活用辞典　研究社
実例英文法問題集　同
柴田武編
ことばの意味 1,2　平凡社
桜庭一郎
英文手紙の書き方辞典　集英社
関口存男
新ドイツ語文法教程　三省堂
スコット・フィースマン
英語学習辞典　初級　中級　上級　Glenview Illinois
長井氏政編
英語ニューハンドブック　研究社✠
狩野直喜
漢文研究法　みすず書房
最所フミ
日英語表現辞典　研究社
旺文社　英和中辞典　旺文社
英語ライブラリー
48　欽定英訳聖書の構文　研究社
54　聖書の語句及び表現　同
The Century Dictionary Vol 1～7　名著普及会✠
Seventeenth－Century News
Vol 24～34　1966～1976　Ans Press
Doris Kerman
Steps to English 1～4　MC Graw－Hill

文　学

上林暁全集 15,16　筑摩書房✠
露伴全集別巻　下　岩波書店✠
標音唐詩三百首　大修館書店
有島武郎全集 2,4,7　筑摩書房✠
福田陸太郎
アメリカ文学研究必携　中教出版
大井浩二
アメリカの神話と現実　研究社
斉藤勇　アメリカ文学史　同
尾形仂　蕉翁外の歴史小説　筑摩書房
角田文衛
おもしろく源氏を読む　朝日出版社✠
遠藤周作
お茶を飲みながら　小学館✠
臼井吉見
獅子座　第1・2部　筑摩書房✠
若槻泰雄
シベリア捕虜収容所　上　下　サイマル出版局✠
全集樋口一葉 1　小説編 1　小学館✠
同　3　日記編 1　同　✠
田川飛旅子
加藤楸邨　桜楓社✠
司馬遼太郎
胡蝶の夢 2～5　新潮社✠
柴谷孝哉
鎌倉　もうひとつの説　青海出版✠
西野嘉四郎
炎と光の人　講談社✠
フリッツマルテイーニー
ドイツ文学史　三修社
定本上田敏全集
6　談話及び講演　学生時代作品　教育出版センター✠
斉藤伊知郎編
ふるさとの想い出写真集　明治　大正　昭和　平　国書刊行会✠
瀬山直O
空間が人をつくる　人が空間をつくる　講談社✠
サイモンミットン
超新星の謎　同　✠
橋本崎　省エネルギーの知恵　同　✠
佐々木孝次他
快の打ち出の小槌　朝日出版社✠
日本哲学思想全書
9　仏教篇　平凡社✠
定本与謝野晶子全集
2　歌集　講談社
11　小説　同
14　評論　同
ロマンロラン全集
16　伝記Ⅲ　みすず書房✠
17　自伝　同　✠
24　芸術研究Ⅴ　同　✠
新潮現代文学
6　人間の運命（父と子）狭き門より　新潮社✠
18　体の中を風が吹く時に行つ　同　✠
29　広場の孤独　ゴヤ　黒い絵について　同　✠
30　恋の果　四季　遠い国　同　✠
34　流れる　闘　同　✠
66　戦艦武蔵　冬の雷　同　✠
明治文学全集
37　政教社文学集　筑摩書房✠
98　明治文学回顧録（一）　同　✠
世界の名著
34　モンテスキュー　中央公論社✠
43　フィヒテ・シェリング　同　✠
72　バジョット　ラスキ　マッキーヴァー　同　✠

君の「読後感」を世に問うてみませんか？

1.第26回青少年読書感想文全国コンクール

主催ー全国学校図書館協議会・毎日新聞社

（1） 課題読書

高等学校の部

① かあさんは魔女じゃない（L.E.アナセン作　木村由利子訳　偕成社）

村人から魔女の烙印をおされた母親が，目の前で焼き殺されるのを見て，少年は狂ったように広野へとのがれる　フィヨルドの自然を背景に，人間の心にひそむ弱さがひきおこす残酷な悲劇を鋭く追究したデンマークの作家の力作。

② 母ふたりの記（豊田穣作　三笠書房）

亡き母への哀惜，互いに相容れない義母との確執……血の根源を求める長い取材の旅は終った。母の家系をさぐりつつ，人生の真実をみつめた鎮魂の記　直木賞作家の特別書下ろし作品

③ 1945年8月6日ーヒロシマは語りつづける（伊東壮著　岩波ジュニア新書）

1945年8月6日，アメリカで完成したばかりの原子爆弾が広島に落とされ，一瞬にして都市を破壊し，無数の住民の生命が奪われた。中学生のとき，みずからも被爆して，その立場から平和を追求してきた著者は，その恐ろしさを訴えるとともに，核戦争の危機のなかで人類の生きのこる道をさぐる。

（2） 字数・用紙

400字詰原稿用紙5枚以内

（3） 審　査

各学校，県・中央審査会を経て，来年1月に入賞作品が決定・発表される。

なお，上記図書は，図書館に買ってある。

2.文庫による読書感想文コンクール

主催ー角川文化振興財団（角川書店）

（1） 対　象

① 中学校・高等学校ごと

② 大学生・一般人

（2） 作　品

各種文庫に入っているものどれでも。

（3） 字数・用紙

400字詰原稿用紙。本文2,000字以内。

（4） 審　査

各中高校・中央審査会を経て，来春，入選が決定される。

上記の催しに応募する本校生は，3年生までは原稿を国語科教官室へ，また4,5年生は直接主催者へ9月5日まで出しなさい。

学期末および夏期休業中の図書館利用について

1. 夏期休業特別帯出の取扱いは7月7日(月)から19日(土)の間に行う。

2. 上記帯出期間以前に帯出した図書は，特別帯出とは認めないので，必ず返納するか再帯出の手続きをすること。
　なお，特別帯出するときは，赤。休み前に返すものは，白の代本板を使用すること。

3. 夏休休業中は館内諸整理のため休館とする。ただし，8月中，毎週水曜日(8:30 ～ 17:00)は開館する。

4. 返納は9月6日(土)までとする。

要望とお答え

1. 日曜日も開館してほしい。（寮生）

この声は，以前からあります。問題は，開いたとして，何人が（誰々が），どの日曜日に，何時間，利用するかという見通し（いわば確約）です。

例えば毎土曜日，夕方4時まで開いていますが，殆ど1～2名しか入館せず，誰もいない日も珍しくありません。

ごく少数の人の，不確実な利用見込みのため，係員が休日に出勤して勤務するというのは，甚だ非能率的であり，困ることでもあります。

毎日曜日，利用したい個人名を書きつらねて，確実な利用申込みをつけて要望される場合には，考え直してみることになりましょう。

単に，ごく少数の人が読書・勉強したいからというのなら，幸い，一般教室棟に各専門学科の「ゼミナール室」というのが四つ設けられたので，そこでは間に合いませんか。

2. 規定では，平日は5時閉館ということになっている。その時刻までは「追い出」さないでほしい。(5C)

家路に帰りを急ぎたいのも人の情ですが，熱心な利用者としては，まことにごもっとも。

今後も，規定通りに開いているようにします。

なお，今後ともさまざまなる御意見を，まず各学級の図書委員に，どしどしお聞かせください。（館長）